

## 第二言語習得における「する」の欠如の誤用要因

### －「名詞＋する」を中心に－

謝蓉（関西学院大学大学院生）

#### 1. はじめに

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 11（以下、『YUK 作文コーパス』と略称する）には以下のような「名詞＋する」<sup>1</sup>における「する」の不使用<sup>2</sup>の用例が見られる。

- (1) 7時から8時まで、教室で勉強<○→し>ます。それから、寝室へ戻ります。<sup>3</sup>（学部1年生／学習歴半年／滞日0／作文）
- (2) 両親は子供と連絡（○→し）やすいように子供に携帯をあたえる。（学部生2年生／学習歴2年／滞日0／作文）
- (3) しかし、最初の面接試験で失敗（○→して）しまいました。（学部1年生／学習歴1年／滞日0／作文）
- (4) 上述の著作の多くは60、70年代に書かれたもので、しかもその多くは日本側に立って神仏の関係を探求（○→した）ものだと思う。（D2／学習歴10年／滞日2.5／作文）
- (5) しかしながら、クリーナー、冷蔵庫、洗濯機などの家庭用電気製品が普通の家庭に次第に普及（○→する）に従って、主婦の家事での時間や体力の消費が変化している。（学部4年生／学習歴3年半／滞日0／卒論）

(1)～(5)は、「する」が求められるにもかかわらず、中国語母語話者日本語学習者（以下、学習者と略称する）は「する」を用いず、「勉強」・「連絡」・「失敗」・「探求」・「普及」に直接後続成分を加え、誤用となった例である。

このように、学習者の作文データには(1)～(5)のような「する」の不使用が多く観察される。これまで「する」の不使用に関する先行研究として、石・王(1983)、李(2016)、岡嶋(2019)などが挙げられる。これらの先行研究では、学習者による漢語サ変動詞における「する」の不使用は主に母語の負の転移あるいは学習者の勉強不足に起因するとされている。しかし、このような「する」の不使用は、学習歴1年の学習者だけではなく、(4)のような学習歴が10年以上の学習者の作文にも観察される。このように習得レベルが異なる学習者にも同じような誤用現象が生じる原因は、単なる学習者の勉強不足ではなく、規

<sup>1</sup> 「名詞＋する」は、「名詞」が「する」を伴って一語化している表現であり、いわゆる、複合サ変動詞のことを指す。本稿における「名詞＋する」は格助詞を介在しない。また、本稿においては、「勉強する」、「テストする」、「値上がりする」などの用例のみ扱う。「わくわくする」、「いらいらする」のような「オノマトペ＋する」は語であるのか、句であるのか、について先行研究において統一されていない。そのため、本稿は「オノマトペ＋する」の用例は扱わないこととする。

<sup>2</sup> 「→」の前の「○」は不使用、「→」の後の「する」は使用すべき「する」の活用形を意味する。即ち、「○→し」は、「し」を用いなければならないのに、用いられていないという意味である。

<sup>3</sup> 誤用データの完全性を確保するため、本論文における例示された用例に使用されている句読点は、原コーパスに準拠している。

則的な体系があるからではないだろうかと考えられる。そこで、本研究では、学習者による「名詞＋する」における不使用を対象に、誤用パターンを明らかにした上で、誤用の要因を質的に検討して考察し、母語の負の転移や学習者の勉強不足以外の可能性を探る。

## 2. 「名詞＋する」における「する」の不使用の実態

『YUK 作文コーパス』では「名詞＋する」における「する」の不使用の用例を検索したところ、結果は156件<sup>4</sup>であった。それらをパターン化すると、①「名詞（○→する<sup>5</sup>）＋Y」・②「名詞（○→する）」という2つのパターンが見られた。

誤用パターンとその具体例を示すと、以下のとおりである。

### ①「名詞（○→する）＋Y」

「Y」には「ます」・「ない」といった助動詞や、「ている」のような「助詞＋補助動詞」といった成分も含まれる。一つのカテゴリに収めることができないため、「Y」と表記する。これらの「Y」は動詞の後に接続され、動詞と一体となって述語形式をつくり、前接している動詞に様々な意味を添える機能を担う。

「名詞（○→する）＋Y」のパターンは、岡嶋(2019)に述べられている「事態性名詞の直接活用」<sup>6</sup>に相当するものである。これらの用例において、学習者は「名詞」の後に直接様々な意味を添える働きがある「Y」をつけ、「名詞＋Y」の形で文においての述語の機能を果たした用例である。例えば、以下のような用例が見られる。

(6) 7時から8時まで、教室で勉強（○→し）ます。(学部1年生／学習歴半年／滞日0／作文) ((1)の再掲)

(7) 集団の中では、日本人は「和」を何よりも重視（○→し）ている。(学部4年生／学習歴3年半／滞日0／卒論)

この2つの用例における誤用が生じた「勉強（する）」、「重視（する）」などの語は、日本語ではサ変動詞の語幹である。一方、以上の用例を中国語で表すと、“从7点到8点,在教室里学习”や“日本人最重视“和””といった表現となる。誤用が生じた語に対応する中国語は「勉強→学习(xué xí)」,「重視→重视(zhòng shì)」であり、いずれも動詞である。<sup>7</sup>したがって、学習者が日本語の「勉強」,「重視」などを動詞として使ったために誤用が生じた背景には、中国語の“学习”(xué xí)、“重视”(zhòng shì)の使い方が影響している可能性があると考えられる。

### ②「名詞（○→する）」

「名詞（○→する）」は、学習者が「名詞」を動詞として捉え、「名詞」が動詞の連体修飾または連用修飾の機能を活性化させた用例である。例えば、以下のような用例が見られる。

(8) 上述の著作の多くは60、70年代に書かれたもので、しかもその多くは日本側に立って神仏の関係を探求（○→した）ものだと思う。(D2／学習歴10年／滞日2.5／作文) ((4)の再掲)

(9) しかしながら、クリーナー、冷蔵庫、洗濯機などの家庭用電気製品が普通の家庭に次第に普及（○→する）に従って、主婦の家事での時間や体力の消費が変化している。(学部4年生／学習歴3.5年／滞日0／卒論) ((5)の再掲)

<sup>4</sup> 本稿は文法上の誤用例のみに絞る。「成長（○→した）環境」のような用例は除外する。

<sup>5</sup> 本稿に述べる「する」は「する」という形だけでなく、「する」の活用形全般を指す。

<sup>6</sup> 岡嶋(2019)は「\*破壊られる」のような例に「事態性名詞の直接活用」と名付けている。

<sup>7</sup> ここで述べている「動詞」は誤用例の文脈に依存して判断した品詞である。以下も同様である。

この2つの用例において誤用が生じた「探求(する)」、「普及(する)」などの語は、日本語ではサ変動詞の語幹である。一方、これらの語に対応する中国語は「探求→探求(tàn qiú)」、「普及→普及(pǔ jí)」であり、いずれも動詞である。したがって、学習者が日本語の「探求」、「普及」などを動詞として使ったために誤用が生じた背景には、中国語の“探求(tàn qiú)”、“普及(pǔ jí)”の使い方が影響している可能性があると考えられる。

以上の①「名詞(○→する)+Y」と②「名詞(○→する)」において、文脈から見ると、誤用として特定できる部分「名詞」は文中で動詞の機能を担うことが読み取れる。また、学習者は「名詞」を動詞として捉え、表す内容に応じ、直接「名詞」に様々な成分を加えて、文を組み立てたことが窺える。一方、以上の用例における誤用が生じるサ変動詞の語幹「名詞」はいずれも日本語ではする「名詞+する」の形で、サ変動詞となるが、中国語では、語幹の「名詞」に対応する中国語だけで動詞として解釈できる。言い換えると、日本語と中国語では、「名詞+する」というようなサ変動詞に対する捉え方に違いが見られる。日本語では「名詞」に「する」をつけ足すことで動詞となるが、中国語では「名詞」のみで完全な動詞と捉えられる。このような捉え方の相違により、学習者は不完全な動詞「名詞」を完全な動詞「名詞+する」と取り違え、「する」の不使用が生じる可能性が高いと考えられる。

### 3. 「名詞+する」における「する」の不使用の誤用の要因

#### 3.1 母語の負の転移

2節の考察で明らかになったように、日本語と中国語における動詞の捉え方には顕著な相違が存在する。日本語では、「名詞+する」という形で動詞を表現するが、中国語では動詞は「名詞」のみで完結する。そのため、学習者は母語の文法ルールや表現方法を目標言語に適用しようとすることで、日本語の「名詞+する」動詞を中国語の動詞と取り違え、母語の負の転移により、「する」の不使用が生じたと考えられる。

#### 3.2 過剰一般化

その他、学習者に「する」の不使用が生じる要因の1つには、文法ルールの過剰一般化が挙げられる。パターン2における後続成分が同時性を表す「につれて」・「に従って」・「と同時に」といった表現がある。以上述べたように、これらの表現は「名詞+する」と接続することもできれば、「名詞+する」における「名詞」に接続することもできる。<sup>8</sup>そこで、学習者は同時性を表す「につれて」・「に従って」・「と同時に」といった表現を運用する際に、文構造の混乱や誤解により、「名詞+につれて」・「名詞+に従って」・「名詞+と同時に」の用法を「名詞+する+につれて」・「名詞+する+に従って」・「名詞+する+と同時に」に適用し、「する」の不使用が生じた可能性があると考えられる。

以上の観点から、学習者が日本語の文法ルールを過剰に一般化し、「する」の不使用が生じた可能性があると考えられる。

#### 3.3 言語処理のストラテジー

2に挙げられている「名詞+する」における「する」の不使用の用例を考察した結果、日中両言語における動詞の捉え方の相違により、学習者は複合サ変動詞「名詞+する」の一部である「名詞」を完全な動詞であると取り違え、「する」の不使用が生じる可能性が高いという仮説を立てた。しかし、以下の用例は「取り違え」だけでは、解釈できそうもないところがある。

(10) 7時から8時まで、教室で勉強(○→し)ます。(学部1年生/学習歴0.5年/滞日0/作文)((1)の再掲)

(10)において、「勉強」に対応する中国語は“学习”であり、「教室で勉強します」に対応する中国語は“在教室学习”である。学習者は「し」を脱落させ、「勉強」の後に丁寧さを表す「ます」をつけていて、

<sup>8</sup> ただし、本稿で扱う「名詞(○→する)」の用例は全て統語上の制約により、「名詞+する」が必要である。

「\*勉強ます」をひとつの動詞として用いている。しかし日本語において丁寧さを表す「ます」にぴったり対応する表現は、中国語には存在しない。中国語には日本語のような丁寧語尾における特定の形式はなく、丁寧さや尊敬の度合いは文脈や敬語表現によって表される。一方、日本語記述文法研究会（2010：121）によれば、「単語は、文の成分になるとき、文法的な意味・機能を表示する形で現れる。動詞や形容詞は、語形を変化させながら、さまざまな文法的な意味・機能を表しわけている」という説明がある。つまり、(10)は「ます」という表現は学習者が母語の知識ではなく、すでに習得している日本語の知識から生み出されたものであると考えられる。

要するに、以上の用例における「する」の不使用は、学習者が、動詞文を作る際に、これまで蓄積してきた母語知識と目標言語の知識を駆使しながら自分なりに解釈して「名詞＋する」を運用することに起因すると思われる。このような「\*勉強ます」といった用法は、学習者の独自の言語処理ストラテジー<sup>10</sup>を駆使した結果生じたものである、と言えるのではないだろうか。つまり、学習者は「名詞＋Y」といった言語処理ストラテジーを用いたために「する」の不使用が生じた、と考えられる。

#### 4. まとめと今後の課題

##### 4.1 まとめ

本研究では、「名詞＋する」において、「する」を必要とする箇所に学習者は「する」を用いず、そのまま「名詞」に後続成分を使用した誤用現象を考察した。誤用は、「名詞＋する」における「する」の不使用を後続成分との緊密性の度合いにより、2つのパターンに分けることができる。それぞれ、①「名詞（○→する）＋Y」・②「名詞（○→する）」である。各パターンを考察した結果、日中両言語における動詞の捉え方の相違により、学習者が「名詞＋する」における「名詞」を動詞であると取り違える現象が見られた。また、「する」の不使用が生じた要因への考察を行った結果、先行研究で述べられている「母語の負の転移」以外に、目標言語における文法ルールの過剰一般化と学習者の言語処理のストラテジーの使用も「する」の不使用に関与していることが明らかになった。以上から、「する」の不使用には、単一の要因のみが作用しているのではなく複数の要因が複雑に関係していると考えるのが自然である。

##### 4.2 今後の課題

本研究では「名詞＋する」に見られる誤用、つまり「する」の不使用を対象に考察を行った。「○○＋する」という形式には「名詞＋する」の他に、「オノマトペ＋する」・謙譲表現「お/ご～する」・「イ形容詞・ナ形容詞＋する」などがある。これらの表現は日本語によく見られる、文の中で動詞の機能を果たす表現である。中国語母語話者日本語学習者はこのような表現の中にも「名詞＋する」と同様に「取り違え」の誤用をしている可能性は大いに考えられる。その誤用の有無、そして原因の解明についても検証する必要がある。

#### 参考文献

- 岡嶋裕子（2019）. 機能動詞結合の特殊性が日本語習得に及ぼす影響—中国語を母語とする学習者を対象に. 大阪大学博士学位論文.
- 迫田久美子（2020）. 改訂版. 日本語教育に生かす第二言語習得研究. アルク.
- 石堅・王健康（1983）. 日中同形語における文法的ズレ日本語. 中国語対応表現用例集（5）, 56-82.
- 日本語記述文法研究会（2010）. 現代日本語文法1 第1部 総論・第2部 形態論. くろしお出版.
- 李楓（2016）. 現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法—コーパス研究の日本語教育への応用—. 神戸大学博士学位論文.

<sup>9</sup> 非文の意味である。

<sup>10</sup> 「言語処理ストラテジー」とは「学習者が学習言語を覚えたり、使ったりする際にどのように言語処理をするかという方法のこと」である（迫田2020:115）。